

# 中国旅行詠の世界 — 江州・杭州 —

高崎 淳子

廬山の瀑布を望む 其の二  
日は香炉を照らして紫煙を生ず  
遙かに見る瀑布の前川に挂かるを  
飛流直下 三千尺

疑うらくは是れ銀河の九天より落つるか

廬山の五老峰を望む

廬山東南の 五老峰

青天削り出だす 金芙蓉

九江の秀色 攪結す可し

吾將に此の地にて雲松に巢わんとす

李白「廬山の瀑布を望む」は二首あり、其の一は五言長詩で二十句からなる。水流は三百丈、細かく風景が詠じられ、「仙人の玉の液で口をそそぐまでもなく、俗世間の塵にまみれた顔を滝のしぶきで洗うことができる。」とのんびり詩仙らしい、感動でまごめられる。其の二はあまりに有名であり、李白のダイナミックを愛するものには素敵な詩である。山とは峰や嶺の集合体であると聞いた。

廬山には百の峰や嶺があるという。その中でも五老峰は美しく分かりやすい姿で、旅行者を迎えてくれる。廬山は松が美しく見分けがつかないほどの種類があるらしい。合鄱口から見晴らすと、鄱陽湖が広がり、五老峰も麓からの姿とは違う山容を見せる。雲のたなびく松の間に巢をつくりたいと思う自然がある。中国有数の避暑地であり、歴史のひとこまに毛沢東や蒋介石がこの地に居たことなど、忘れさせる。

一管の筆たづさへて秋風の大江さかのぼるやまと歌人

朝月夜楊ちる岸を見つつあれば彭沢県は過ぎぬといふなり

長江の水ひむがしに五千年世うつり人ほうつりゆけども

蜜柑売る店に見いでつ土偶の琵琶もたる女江州の司馬

もやごもり廬山はみえずかのあたり香爐峯と友は指ざし語る

佐佐木信綱『遊清吟藻』

佐々木信綱は三十二歳明治三十六年十月南清に出発し、翌年一月に帰国している。この旅行から得られた短歌は「遊清吟藻」、文章は「南支風景談」として発表された。中国旅行に先立って明治三十

六年に出版された処女歌集が「思草」である。

一まきの書たづさへて筆のせてひとりわが行く唐土の秋（将遊清国）  
佐佐木信綱「思草」一九〇三年刊

巻末の一首は印象的である。この印象から信綱の中国旅行詠をたぐり、検証していったと言える。具体としての作品から、処女歌集が明治三十六年にまとめられた経緯をたどれば、巻末の一首にこめられた信綱の思いと野心も理解できる。漢文序に依田学海翁、和文序に源高湛の森鷗外博士である。「一まきの書」である「思草」は、この中国旅行で会った文人に贈られた。

日清戦争に勝利し、日露戦争開戦前夜の日本と極東情勢の中で、実に風景的な叙情が展開されていく。上海から長江中流まで、細やかに立ち止まりながら叙情されていく南支の風景といつてよいだろう。

この当時清国に遊ぶというのは、どういうことだったのだろうか。およそ十年前の明治二十七年に出版された博文館刊「支那征伐の歌」は、内閣総理大臣伊藤博文、海軍大臣西郷従道、陸軍大臣大山巖の名を連ねている。

亞細亞のはての一孤島

國小なれど東洋の

霸王の権を握るべき

時機は来れり今ぞ今

宇宙にかがやく日本の

國の志るしの日章旗  
地球の上にくちたてむ  
時は来れり今ぞ今

若干を引用しても解るように、現代的思想と感覚からすれば、どこかアニメーションの世界の非現実感であるが、明治の時代精神、日清戦争という時局から考えると、極めて意義深く、重みを持つてくる。亞細亞、宇宙、地球と言挙げしなければならない莫とした大義、鼓舞されるものは霸王の権である。それは「征伐」という題名のもとに、臣民を昂揚させていったのであろう。一人の歌人というよりも、公を負った人の歌にとるのは現代的視点に過ぎるかもしれない。明治四十二年三月に東京民友社発行の「國民歌集」がある。東京帝国大学文科大學講師佐佐木信綱選とある。

そもくわが日本人の國民精神たる忠君愛國の至情をうたへるものを、歴代の和歌の中より選びて一卷となし、國民の常に座右に置きて誦せむ料になさば、國民教育の上に益あるべきことうづなし。

この序に続き、忠君愛國、父子夫婦兄弟朋友の愛、意調雄健、立志訓誡の歌が、神武天皇から近年まで六百六十首選び出されている。ここに見えるものは、眞理信念としての意義である。

君が代は限もあらしはてもあらし武藏野をしも大宮にして

佐佐木弘綱

歌集に選ばれている弘綱の短歌に見えるものも忠君愛国の調べと意義にはかならない。国学の家に育まれた当然の大義である。

これらの存在が「晴」であるとなると、信綱歌集の声調は「葵」である。短歌史が負う側面でもある。「葵」であるからこそ、歌人信綱の面目が叙景されていくのである。処女歌集が、その業績のわりには遅い刊行であり、中国旅行を契機としたことも首肯できるところである。

やまと歌人は、やまと歌と筆を携えて南支を旅するのであるが、風景を意識させるのは、雪舟をはじめとする水墨画のイメージがまずあったのであろう。悠久の長江をまさに五千年の時代のすぎゆきを想い浮かべ、人はうつり世はうつれどという詩歌的感慨を叙情する普遍性を踏襲しながら調べはやまと歌である。初出の「心の花」では、下句が「國は老いたり民ただに眠る」になっている。このほうがより直接的感慨に近いと考えるが、前掲のものはやや臚化したのであろう。

白居易の「長恨歌」と並んで、広く長く歌謡俗語的にも愛誦されたものに「琵琶行」がある。友人との別れにさいして、耳にした鄙にはまれなる琵琶の音に心惹かれたところから物語は展開してゆく。貶謫の憂愁を友とした江州司馬白居易は、廬山の麓に草堂を立て、「枕草子」で有名な遣愛寺の鐘を聞き、香炉峰をながめ暮す日々を創造していった。諷諭詩から閑適詩へと、詩の翼を旋回させる白居易には閑々とした楽しさも存在する。

長江三峡あたりは蜜柑が美味しい。廬山も柑橘が特産である。美しい果実ではなく、野趣味のあるものである。露店的に並ぶ蜜柑の

そばに、土偶があつたのであろう。琵琶持つ女と江州司馬を詠出することで、九江を叙情しているのであるが、たまたま目にした嘯目であつたとしても、作品として残すことに意味はあるだろう。「心の花」に発表された明治三十七年の作品にはなく、全歌集に採録された「九江」の歌二首。その一首がこの作品である。

「南支風景談」は「夕照の美」「岳陽樓と洞庭湖」「浮屠と風鐸」という項目で述べられ、九江廬山への言及はない。中国旅行直後の「心の花」に「南清漫遊談」として談話が発表されている。これは明治三十七年の紀元節（宣戰の詔勅、仁川旅順の捷報）に催された「竹柏園主歓迎会」でなされた談話を佃事務所員速記という形で、四月号から七月号まで四回にわたって連載している。それによるとこの二ヶ月半の旅行で漫遊したところは、江蘇、安徽、江西、湖南、湖北、浙江、四川省である。順序として挙げられているのは、上海、蕪湖、九江―潯陽江、漢口等、揚子江沿岸の上水。湖南に入つて、岳州府―岳陽樓、洞庭湖、汨羅、湘陰、長沙、昭山、湘潭。新堤まで引き返し、沙市、荊州城、宜昌から三峡の下峡に廻り、漢口まで帰り、下水には南京、鎮江。長江を横ぎって大運河に入つて揚州。上海に帰つて蘇州府、杭州府である。地名をたどるだけでも、その旅程は想像を絶するものがある。

この漫遊談に先立つて石黒男爵の祝辞も掲載されているが、古来支那に入つて和歌を詠じた者は、阿倍仲磨を筆頭に数人はあるが、他の用務を帯び、歌学のために入清した佐々木先生が嚆矢である旨を述べている。漫遊談二十一が「廬山及び九江の市街」である。

九江は風光閑雅の地、附近は名勝に富んでをる。白樂天が江州

司馬に貶せられた時、喜んで、匡廬在念久矣今得青山緑水中爲風月主人幸甚と日ひ、赴任して後、江州司馬廳記に、江州左匡廬右江湖土高氣清富有佳境と書いた所。廬山は古への南嶂山で、北は大江に面し、東は彭象に臨んでをる。山の東南に李白が青天削出金芙蓉とうたつた五老峰がある。五老相連なるが如き形から名づけたので。朱子の白鹿書院は峰下に、周子の灑溪書院は山下にある。香鐘峰は其形圓聳、常に雲氣を出だす。其下に瀑布がある。日照金鐘生紫烟遙看瀑布掛長川飛流直下三千丈疑是銀河落九天の詩がよく悉して居る。白樂天此山下に草堂を築いて、堂中に琴一張、儒、道、佛の書、各兩三巻をおき、仰いで山を觀、俯して泉を聽いたところ。東林寺の前には、彼の白蓮社を結んだ慧遠が客を送つた虎溪橋、三笑亭がある。又府の西南九十里に、陶淵明が故宅の地柴桑栗里があるとの事。

ここに現前している風景は、日本人が基底に教養としてイメージしている景に近い。日本文学の源流として享受してきた『白氏文集』の作者白居易または白樂天には、この九江当時江州司馬への貶謫が相当にこたえている。「初めて官を貶せられて 望秦嶺を過ぐ」から秋風に吹かれる白居易をたどっていくと、そのやりばのない心情が伝わってくる。藍橋駅、商州、四皓の廟を商山に訪う。

臥しては秦の亂を逃れ 起ちては劉を安んず、  
舒卷 雲の如く 自由を得たり。  
若し精靈有らば 應に我を笑ふべし、  
一事をも成さずして、江州に謫せらる。

元和十年（八一五）宰相武元衡暗殺事件の真相究明を訴える上奏をし、越権として当局から睨まれた結果貶謫され、うちのめされてる自身を、四皓の靈魂に笑わせる。自由とは自分の意志のままに自由自在であり、当時の俗語であると注釈はされている。出所進退は当然のことながら、言論さえまならぬ自分の身を遠く江州まで運ばねばならない憂愁は深く、この廟でさらにえぐられる。このち「人生四十未だ全くは衰へず」の「白鷺」があり、襄陽で舟に乗る。黄鶴樓や長江をめぐりながら江州にたどりつくのである。

「枕草子」で有名な草庵や遺愛寺は、廬山の麓、西林寺東林寺のあたりにあったという。あの物憂い閑適な感じが、この流謫の日々の心模様だと、もう一度理解を深めることができる。現在廬山の上には、花径公園があり、復元草堂がある。石刻された詩は大林寺の桃花を詠んだもので、ほっとさせる。

人間 四月 芳菲盡く、  
山寺 桃花 始めて盛んに開く。  
長恨す 春歸つて 覓むる處無きを  
知らず 轉じて此の中に入り來らんとは。

白鹿洞書院は現在も多くの人が訪れる観光スポットである。唐代に李渤李涉兄弟が、鄱陽湖の北西岸の星子鎮から溪谷を辿つて廬山の五老峰の山中に入り草庵を建て読書生活をした。白鹿を飼つたので李渤は白鹿先生と呼ばれ、盆地は白鹿洞と呼ばれるようになったことに由来している。廬山国学として国子監と同格であった時代や

廢墟と化した時代を経て、宋代朱子が南康軍知事として赴任し、白鹿洞書院は復興された。日本の江戸時代の朱子学―林羅山、湯島昌平齋―を思っただけでも、その絶大な影響を思うことはできる。近代に入つての教育勅語や広く学校の校則に影響を与えた「白鹿洞書院揭示」は今も掲げられている。

陶淵明はこの地九江で三六五年に生誕している。当時潯陽柴桑である。彭沢県令であつた淵明は、異母妹の死によつて、辞任し故郷に帰る。愛誦されてやまない「婦去來辭」はこの婦隱宣言なのである。淵明が生きた東晋は、五胡の争乱が続いた北に比べて、江南の王朝は貴族文化を展開する。書聖王羲之も東晋の名門貴族であり、江州刺史を務めた時期があり、ゆかりの寺跡もある。三一六年に西晋が滅んで隋唐帝国が出現するまでの約三百年の不安定な南北分裂王朝時代に、陶淵明・王羲之を生んだ東晋王朝の奇跡に感動を深くする。

廬山を訪れた人に谷崎潤一郎がある。谷崎の中国趣味は有名であり、支那服の写真をどこかに記憶している人も多いだろう。

成る程極めて峻嶮なる、而も殆んど一直線の石段なり。恰も箱根の旧道を想起せしむ。途中時々西洋人の老婦人や紳士の下山するに会ふ。この路を登り詰めたる左側に休み茶屋あり。右は大林峰ら面して数千尺の溪谷に臨む。屹立せる峰の斜面には石炭の如き黒き岩石のところどころに露出せるを見る。峰の開けたる処、谷の向うには揚子江一抹の白雲の如く弓なりに捲みて天に冲す。上流の方は下流より少しくひろがり、全く空に向ひて走れるが如し。その上にも亦同じやうなる雲ながれたり。遠

く山麓に西林寺の白塔を望む。塔より右の松林の間に隠見せるが東林寺なるべし。されどその側なる香爐峰は見るを得ず。

「廬山日記」大正七年十一月十日、十二日の中ほどの記述からわかるように、風景の端的な描写に終始している。ことさら詩情的ではないが、人物も点景のように描写され、読む者のイメージを喚起する力を内に秘めていると言つてもよい。むしろすがすがしい感動を表現している。「秦淮の夜」「西湖の月」は谷崎の中国体験を表現したすぐれた小編とされる。この第一回目の旅程は、大正七年十月九日東京を発ち、十日下関着、関釜連絡船で釜山に十一日着。奉天で木下左太郎宅に逗留し、天津を経て北京で十日滞在。京漢鉄道で漢口へ、漢口から船で長江を下り九江へ入つている。その後は南京、蘇州から上海、杭州へ行き、上海へ立ち戻つて帰国するという「鉄道院のガイドブックと地図とに拠つて自分の勝手に歩き廻る」ツーリストの旅であつた。二回目は大正十五年航路で上海へ行き、滞在一ヶ月余の間に、内山完造を中心にして、郭沫若たち若き芸術家との交遊が展開している。その後谷崎は訪中の団長を頼まれることもあつたらしいが、辞している。文学者谷崎らしきともいえる。

対照的に芥川龍之介は、大正十年三月末大阪毎日新聞外視察員として中国に派遣されている。上海到着後、乾性肋膜炎を患い、三週間入院している。上海、江南、長江、廬山に至り、武漢、洞庭湖から長沙、北京、朝鮮を経て、七月末に帰国。この間の紀行は「上海游記」「江南游記」として大阪毎日新聞に連載され、大正十四年『支那游記』としてまとめて刊行されている。又小説では「將軍」「桃太郎」、旅行中ドラマの「湖南の扇」がある。漢詩のみにとどま

らず漢籍が夥しく芥川旧蔵書として収められているという。書画への関心も深く、古典で育まれた想像の中の中国から、辛亥革命、五四運動、共産党結成という胎動する中国へ、ジャーナリストとして雄飛したことになる。

芥川の「長江遊記」における廬山の描写は、「若葉を吐いた立ち木の枝に豚の死骸がぶら下がっている。」で始まり、

風光は奇絶でも何でもない。唯雑木の茂つた間に、山空木が咲いていただけである。廬山らしい気などは少しもしない。これならば、支那へ渡らずとも、箱根の旧道を登れば沢山である。

とひややかである。

芥川はこの旅で竹内栖鳳の一行と一緒にいる。栖鳳は塔が好きで、その原風景的古画から、中国大陸へ見に行きたくなったという。大正八年の春は肺炎のために中止し、大正九年四月二十九日神戸を出港し、七月二日に京都に帰着している。翌年十年四月二十二日から六月二十日まで、二回のはぼ同行程の中国旅行を行っている。画業や絵ハガキへの影響など興味深いのが、ここでは言及しない。栖鳳が、上海の銀行に二万円をあずけて旅行費用にあてたということに驚いた。総理大臣の月給が一千円だったという。また「日支周遊券」が一人二九八円九四銭で購入されたという。さきの芥川の「長江遊記」にも、蕪湖から南陽丸に乗船し、竹内栖鳳氏一行と一緒にになり、九江で下船し、廬山に登るという行程を同じくした記述がある。

代表として、谷崎、芥川、竹内を取りあげたが、大正年間に中国

へ旅し、文学的芸術的成果をあげた人は少なくない。西原大輔氏は『谷崎潤一郎とオリエンタリズム 大正日本の中国幻想』で、エドワード・W・サイードのオリエンタリズム論を谷崎の「支那趣味」分析の軸としている。「オリエンタリズムとは、植民地主義あるいは帝国主義を前提とした、帝国による、被支配国並びにこれに類する地域に関する言説で、西洋のみならず日本にも適応可能な概念」、「支那趣味」とは、「大正時代を中心とした中国文化に対する異国趣味的関心の総体」と定義して、詳細な論及をされている。

要するにオリエンタリズムとしての「支那趣味」の根が、漢詩漢文南画にあるとしても、大正年間に発展したものは、オリエンタリズムを適用できる「支那趣味」であり、彼らの作品に反映されているものも、その概念の具象として展開されたものと考えることができる。

信綱の歌は、こうした時代の先駆けとなるものと位置づけることができるのである。北中国や満州へは、比較的旅をしやすかったのか、歌人の作品も散見できる。南支への旅、特に内陸を詠ったものは少ない。

病院の生活にもなれて九江の古塔を仰ぐ今日の夕も

穂芒の枯れし向うに九江の古塔が見ゆ夕焼の下に

見透しつかぬ戦況に今宵もいらだちて臥し居れば負傷せる友は  
叫び拳ぐ

かりそめの病と思へ次々に病みつづけつつ秋深みたり

冬瓜の汁をすすりて横はる兵站病院の朝明け寒し

病みてあれば故郷の家に母とゐて茶漬食ひたる夢を見たりき

揚子江の水に遠く夕焼くる雲冷々としづまり行きぬ

渡辺直己『渡辺直己歌集』一九四〇年刊

渡辺直己は明治四十一年に呉市に出生し、昭和十四年八月二十一日中華民国河北省天津県鹹水沽西南方八杆八里台の戦闘に於て戦死した人である。広島高等師範国漢科時代から、文芸雑誌を刊行している。女学校教諭となつたのち、アララギ会員となり、土屋文明選に発表していく。昭和十二年七月広島歩兵第十一聯隊補充隊に入營し、北支中支戦線での短歌が、やがて遺歌集としてまとめられる。後序は土屋文明である。

事変従軍諸家の作品の盛観については前にも言ふ如くであるが、渡辺君の作品はそれ等の中に在つても一頭他を抜いたもののように私は考へてゐたが、殊に渡辺君の作品は所謂事変作品の先駆を為すものであつたことに私は重大の意義を認めようとするものである。渡辺君が教育者として学究として文化人として戦争といふ重大事に直面しての感激は複雑極まりないものであつたらうが、それを単純な短歌の形式として撰取し、表現した君の努力功績は短歌史の一事実としてもゆるがせに出来ないものやうに私は考へてゐる。

昭和十五年二月の記である。十二年七月七日蘆溝橋事件からの日中戦争は、北支事変、支那事変とも命名された。後序によれば大日本歌人協会は支那事変歌集を編輯している。渡辺直己は記念品を贈呈された九人の中の一人である。

九江のシンボルは能仁寺塔であるという。東晋時代からの歴史を持つこの塔は、夕日に美しいらしい。甘棠湖と南湖の水を美しいと思ふのは、長江の赤泥色を見るからであるが、「琵琶行」の月をひたす浸月亭を持つ煙水亭は甘棠湖畔にある。ここに赤壁の戦で勇名を馳せた周瑜点将台がある。このあたりにあつた兵站病院から夕日に映える古塔を眺め、死までの時間、つかのま病むことで、休息したのである。昭和十三年九月に「腸炎及びマラリアを病み、野戦病院に収容さる。」十二月「退院、九江を出発して武昌に至り中隊に復帰す。」とある。北支戦線に復帰した作品群の後方、歌集巻末近く、

人間の意識を説けるここだくの説もはかなし戦の前に  
教育よりも祖国防衛の本能なりと吾は言ひ切りぬ反対者多かり  
き

吾が教へし児等も次々と去り行きて泰山木の花咲き出でにけむ  
『渡辺直己歌集』  
教育者としてみずからも兵とならなければならなかつた渡辺の苦惱は、現代的視点とは違ふ苦汁と時代精神を表現している。

毎年この季節になると西湖の曾遊を憶い出して記を作りたいと思ひながら早くも八九年を経た「ちよと芥川の死んだ年で、その計を自分は杭州から帰つて上海の客舎で耳にしたものであつた。それ故それが一九二七年であつたことは忘れもしないが、何月の幾日であつたやら記憶が甚だおぼつかない。

佐藤春夫「支那雜記」の「西湖の遊を憶う」の書き出しである。芥川は「江南遊記」で杭州に筆を尽くしている。廬山の表現に比べ、と優しいが、描写的であるより批評的である。

大まかな自然に飽き飽きした、支那の文人墨客には、或は其処が好いのかも知れない。しかし、我々日本人は、繊細な自然に慣れているだけ、一応は美しいと考えても、再応は不満になつてしまふ。

日本人は蘇東坡の詩を愛誦する人が多いように、突兀とした山水ではなく、水と光のデリケートな西湖に美景を抱いている。

が、もしこれだけに止まるとすれば、西湖は兎も角春寒を怯れ、支那美人の靚だけはある筈である。処がその支那美人は、湖岸至る所に建てられた、赤と鼠と二色の、俗悪恐るべき煉瓦建の為に、垂死の病根を与えられた。いや、独り西湖ばかりじゃない。この二色の煉瓦建は、殆ど大きい南京虫のように、古蹟と云わず名勝と云わず江南一帯に蔓つた結果、悉風景を破壊している。私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の為に不平だったばかりか、女子の霊の為に不平だった。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉じた鑑湖秋女俠の墓門にしては、如何にも気の毒に思われたのである。

秋瑾が紹興で逮捕され刑死したのは、一九〇七年明治四十年の七月であるから、その死から十四年が経っている。ただし彼女の死の

事情からして、墓は九遷しているという。現在の西湖孤山西南麓西冷橋東に落ち着いたのは一九八一年である。逆匪の墓は許されず、軼々とし、辛亥革命後「秋瑾烈士」の墓として一九一三年西湖西冷橋西に七遷目の移転をしている。芥川が見たのは、この墓ということとなる。魯迅の「葉」で「血馒头」を知ったときの驚愕は忘れられないものがある。日本への留学経験のある革命詩人中輻英雄について、武田泰淳「秋風秋雨人を愁殺す」によって人物伝としての多くのイメージと知識を与えられているが、現在の西湖孤山にある墓に詣でその像を見ると、もつと違う女性像を探したくなる。

とざしたる湧金門の朝月夜はつはつ白きみづうみの色

ゆさゆさとゆれごちよき轎子にして西湖を見れば王侯さびぬ  
西湖の朝の薄氷棹もて打ち棹もて打ちつわが舟をやる

白堤は蘇堤は未だ楊もえず三潭印月の階段のほる

林処士の霊に請ひて折る梅一枝つばみここだくすでにふふめり

「遊清吟藻」

信綱はゆつたりと風景を叙情している。とろとろと溶ける風情の繊細な水景色に西湖十景の叙景を詠じ、色彩を与えている。信綱の短歌観と感受性と言ふべきだろうか。暗黒や泥池などは詠わないのである。そこにまた歌人信綱の面目も存立する。林処士は北宋の詩人、林逋、和靖先生である。鶴や鹿と暮らし、梅を妻とした隱遁詩人である。このような隱逸の詩人に思いを馳せるのも旅の叙情としては正統と言える。

江州に左遷された白居易が、八一五年から江州にあり、八一八年



十月忠州刺史に除せられ、八一九年三月に着任している。八二〇年都に召還され、主客郎中知制誥等を歴任する。外任を求めて再び都を離れるのは、八二二年杭州刺史に除せられてのことである。

「白堤」「蘇堤」とは何なのか。絵葉書的なイメージは誰もが持っている。歌枕の知識が優先するかもしれない。実際に西湖を訪れば、この二つの堤は美しく湖を装飾し仕切っている。「堤」であり

二代詩人の名を負うのであるから、どのような由来かと気になるのであるが、彼らが詩人であると同時に官吏であることを思いださなくてはならない。ともに州の長官としてこの地に着任し、長官の仕事をしているのである。杭州の長官にとって治水灌漑事業は必須のことであった。西湖はもととが海の入江であり、杭州は不毛の湿地帯であった。「桑滄の変」によって浮上したのである。

「白公堤白沙堤」は白居易がしばしば遊び、詩に登場させたのであるが、治水は西湖の堤防を改修して数尺高くしたことを指す。「李泌の六井」という市民の生活用水の手入れもしている。「錢唐湖石記」に詳しい。「惜別白公」という群像を現在西湖畔にみる事ができる。都に帰るに臨んでの惜別である。「州民に別る」や「西湖の留別」を思う。

「蘇堤」は蘇東坡が大改修工事をしたことに由来する。蘇東坡が通判杭州を授けられたのは、一〇七一年六月で、杭州に至ったのは十一月である。この頃日本から入宋したのが、成尋阿闍梨である。

母の日記風歌集の方が印象的であるが、源俊賢の娘で、実方の息子貞叙と結婚して生まれたのが成尋であるとされる。岩倉大雲寺に入り文慶に師事した成尋が、渡宋五台山巡礼の宿願を果たすため、申文を申請したのは一〇七〇年六十歳の時である。一〇七二年三月松

浦郡壁島で宋の商船に乗り込むまで、幾つかの困難を乗り越えている。同年四月杭州湊口に到着し、まず天台山行き許可願を申請するため役所を訪れた。そのときの杭州通判は蘇東坡である。役所で茶を喫している。西湖で有名なのは龍井茶であるが、当時どのようなお茶だったのであろう。

評伝を書きなすむ夜半、信網の後姿ばかり露に見えて

佐佐木幸綱「反歌」一九八九年刊  
宣長先生のことをし語ればおのずから信網とその父に及ぶも

金色の獅子」一九八九年刊  
西湖凍結鋭き夢のさめぎわの窓にかがやく鈴掛若葉

「瀧の時間」一九九三年刊

佐佐木幸綱は信網の孫として、その家業を継ぎ発展させている歌人であり学者である。一九七六年に早稲田大学訪中団の一員として、中国へ旅している。また、一九八九年に中国（西湖、紹興）へ旅している。多数の歌集から西湖の歌を一首挙げる事ができる。

ハンカチを膝にのせればましかくに暑い杭州体温の町  
錢塘江大橋遠く見ておれば緑の列車が風を切り取る

俵 万智『サラダ記念日』一九八七年刊

中国旅行詠「夏の船」三十七首は、上海・西安・洛陽・杭州への旅で、若やいだ旅情で展開し、信網からの「心の花」の時間を感じさせる。

【主要参考文献】

【南支風景談】世界紀行文学全集佐佐木信綱 修道社

【西湖の遊を憶う】同右 佐藤春夫

【廬山日記】同右 谷崎潤一郎

【支那雑記】佐藤春夫 大道書房

【歌集「思草」について】前川佐美雄「心の花」昭39・4月号

【遊清吟藻】について 山本友一「同右」

【支那征伐の歌】佐佐木信綱 博文館

【國民歌集】佐佐木信綱 東京民友社

【南清漫遊談】佐佐木信綱「心の花」明37・14567月号

【朱子の白鹿洞書院揭示の日本への伝来と普及】平坂謙二 東方書店

【陶淵明 詩と酒と田園】安藤信廣他編 白帝社

【王羲之の伝論】森野繁夫 清水書院

【王羲之 六朝貴族の世界】吉川忠夫 中公叢書

【谷崎潤一郎上海交遊記】千葉俊二 みすず書房

【オリエンタリズム】E・Wサイード 平凡社

【特派員芥川龍之介】関口安義 毎日新聞社

【上海遊記・江南遊記】芥川龍之介 講談社文庫

【竹内栖鳳】田中日佐夫 岩波書店

【秋風秋雨人を愁殺す】現代日本文学大系武田泰淳 筑摩書房

【競雄女侠伝】永田圭介 編集工房ノア

【中国の都城4蘇州・杭州】村上哲見 集英社

【中国長江歴史の旅】竹内実 朝日選書

【成尋の入宋とその生涯】伊井春樹 吉川弘文館

【白居易研究】花房英樹 世界思想社

【白居易】中國詩人選集 岩波書店

【引用詩歌テキスト】

【白氏文集】新釈漢文大系 明治書院

【李白】中國詩人選集 岩波書店

【佐佐木信綱全歌集】佐佐木信綱 ながらみ書房

【渡辺直己歌集】現代短歌全集 筑摩書房

【佐佐木幸綱作品集】佐佐木幸綱 本阿弥書店

【サラダ記念日】俄万智 河出書房新社

(たかさき・あつこ)